

ア	.	私	が	携	わ	っ	た	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	特	徴	と	業	務	パ	ッ	ケ	ー	ジ	
		の	採	用	目	的																			
ア	ー	1	.	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	特	徴													
		私	の	勤	務	す	る	会	社	は	、	従	業	員	2	0	0	名	程	度	の	S	I	(シ
ス	テ	ム	イ	ン	テ	グ	レ	ー	ト)	企	業	で	、	事	業	の	約	半	分	が	顧	客	か	
ら	の	受	託	開	発	で	あ	る	。	私	は	主	に	県	や	市	町	村	の	シ	ス	テ	ム	開	
発	を	行	う	部	署	に	所	属	し	、	約	5	年	前	よ	り	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	管	
理	を	任	さ	れ	て	い	る	。																	
		今	回	私	が	担	当	し	た	業	務	は	「	市	町	村	合	併	に	伴	う	納	税	シ	ス
テ	ム	の	再	構	築	」	で	あ	る	。	A	市	は	、	3	町	と	1	村	が	合	併	を	行	
う	。	そ	の	各	町	村	で	独	自	に	稼	働	し	て	い	る	納	税	シ	ス	テ	ム	の	デ	
ー	タ	を	合	併	と	と	も	に	1	つ	に	統	合	し	、	新	し	く	構	築	し	た	シ	ス	
テ	ム	へ	セ	ッ	ト	す	る	。																	
		体	制	と	し	て	は	、	シ	ス	テ	ム	構	築	チ	ー	ム	、	デ	ー	タ	移	行	チ	ー
ム	、	イ	ン	フ	ラ	チ	ー	ム	の	3	つ	に	分	か	れ	、	開	発	要	員	は	ピ	ー	ク	
時	で	2	0	名	、	開	発	期	間	は	1	1	ヶ	月	、	開	発	工	数	は	1	8	0	人	

月	で	あ	る	。	私	は	こ	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	に	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	マ	ネ	ー
ジ	ャ	と	し	て	参	加	し	た	。															
ア	ー	2	。	業	務	パ	ッ	ケ	ー	ジ	と	そ	の	採	用	目	的							
	今	回	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	で	は	、	我	が	社	の	関	連	会	社	A	社	が	開
発	し	た	パ	ッ	ケ	ー	ジ	シ	ス	テ	ム	を	導	入	す	る	こ	と	と	し	た	。	そ	の
理	由	は	以	下	の	と	お	り	で	あ	る	。												
	・	開	発	期	間	が	1	1	ヶ	月	と	非	常	に	短	い								
	・	シ	ス	テ	ム	開	発	、	デ	ー	タ	移	行	、	イ	ン	フ	ラ	整	備	と	1	度	に
		必	要	と	な	る	要	員	が	多	い													
	・	4	町	村	の	う	ち	3	町	の	現	行	シ	ス	テ	ム	は	、	以	前	A	社	が	開
		発	し	た	シ	ス	テ	ム	で	あ	り	、	デ	ー	タ	移	行	が	比	較	的	容	易	
	・	A	市	の	予	算	に	納	め	る	こ	と	が	可	能									
特	に	今	回	は	、	県	内	初	の	町	村	合	併	と	い	う	こ	と	も	あ	り	、	他	市
町	村	や	同	業	者	も	注	目	し	て	お	り	、	合	併	初	日	よ	り	シ	ス	テ	ム	が
動	か	な	い	失	態	は	避	け	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	と	い	う	我	社	の	都	合
も	あ	っ	た	。																				

イ	.	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	が	必	要	と	な	っ	た	理	由	と	プ	ロ	グ	ラ	ム	
		の	概	要																					
イ	ー	1	.	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	が	必	要	と	な	っ	た	理	由					
		合	併	後	の	A	市	の	体	制	と	し	て	旧	町	役	場	の	1	つ	を	本	所	と	し
残	り	の	3	町	村	の	役	場	を	支	所	と	す	る	。	4	つ	の	本	支	所	は	専	用	
回	線	で	結	ば	れ	る	予	定	だ	。	そ	の	環	境	の	中	で	納	税	シ	ス	テ	ム	を	
導	入	す	る	う	え	で	の	要	件	を	ま	と	め	て	い	く	事	と	な	っ	た	。	前	述	
も	し	た	が	、	旧	3	町	の	シ	ス	テ	ム	と	新	パ	ッ	ケ	ー	ジ	シ	ス	テ	ム	は	
関	連	会	社	A	社	が	開	発	し	て	お	り	、	旧	シ	ス	テ	ム	の	機	能	は	全	て	
網	羅	し	て	い	た	た	め	S	L	A	に	関	し	て	は	問	題	は	な	く	、	要	件	定	
義	は	問	題	な	く	進	ん	だ	。	し	か	し	、	そ	の	要	件	定	義	の	後	半	に	差	
し	掛	か	り	、	支	所	に	て	行	う	業	務	に	関	し	て	打	ち	合	わ	せ	を	行	っ	
て	い	る	時	に	問	題	が	発	生	し	た	。													
		本	来	、	市	役	所	の	納	税	業	務	と	し	て	は	本	所	に	て	一	括	し	て	課
税	、	納	付	書	の	印	刷	・	発	送	、	消	し	込	み	、	納	税	証	明	書	の	発	行	
な	ど	を	行	い	、	支	所	の	業	務	と	し	て	は	納	税	の	受	付	を	行	い	、	本	

所	へ	送	付	す	る	く	ら	い	で	あ	っ	た	。	ま	た	、	セ	キ	ュ	リ	テ	ィ	の	問
題	も	あ	り	、	納	税	シ	ス	テ	ム	を	各	支	所	で	使	用	す	る	場	合	は	大	き
く	制	限	が	あ	っ	た	。																	
し	か	し	、	今	回	の	A	市	な	ど	平	成	の	大	合	併	で	誕	生	す	る	市	は	、
少	し	違	っ	て	い	た	。	今	回	の	合	併	目	的	の	大	半	は	、	国	か	ら	の	補
助	金	が	目	的	で	あ	り	、	必	ず	し	も	町	村	民	が	望	ん	だ	合	併	で	は	な
い	場	合	が	多	い	。	そ	の	た	め	、	合	併	す	る	に	あ	た	り	さ	ま	ざ	ま	な
公	約	が	さ	れ	て	い	る	場	合	が	あ	る	。	A	市	も	例	外	で	は	な	く	、	合
併	す	る	に	あ	た	り	、	”	住	民	サ	ー	ビ	ス	と	し	て	従	来	と	同	等	の	サ
ー	ビ	ス	を	全	所	で	行	う	”	と	い	う	公	約	が	あ	っ	た	。					
	そ	の	公	約	を	要	件	と	し	て	実	現	す	る	た	め	に	は	、	パ	ッ	ケ	ー	ジ
の	標	準	機	能	で	は	足	り	な	い	機	能	が	あ	っ	た	た	め	、	開	発	元	の	A
社	に	確	認	を	行	っ	た	が	、	合	併	ま	で	に	対	応	す	る	こ	と	は	難	し	い
と	の	回	答	が	あ	っ	た	。	そ	こ	で	私	は	、	標	準	機	能	で	不	足	し	て	い
る	部	分	に	つ	い	て	、	必	要	な	部	分	を	洗	い	出	し	、	A	市	と	本	当	に
実	装	が	必	要	か	を	協	議	す	る	こ	と	と	し	た	。								

イ	一	二	.	利	用	者	と	合	意	し	た	内	容	と	合	意	に	至	っ	た	経	緯		
	一	般	的	に	業	務	パ	ッ	ケ	ー	ジ	を	採	用	す	る	目	的	は	、	業	務	プ	ロ
セ	ス	の	改	善	、	開	発	期	間	の	短	縮	、	保	守	性	の	向	上	、	な	に	よ	り
開	発	コ	ス	ト	の	削	減	が	あ	る	。	そ	の	た	め	パ	ッ	ケ	ー	ジ	の	標	準	機
能	を	最	大	限	適	用	す	る	。	し	か	し	、	今	回	の	様	に	ど	う	し	て	も	必
要	で	利	用	者	の	要	件	を	満	た	せ	な	い	場	合	は	、	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ
ム	に	て	対	応	し	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	。	そ	の	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム
を	作	成	す	る	場	合	で	も	開	発	は	必	要	最	小	限	に	抑	え	る	必	要	が	あ
る	。	な	ぜ	な	ら	、	バ	ー	ジ	ョ	ン	ア	ッ	プ	や	制	度	改	正	な	ど	の	業	務
パ	ッ	ケ	ー	ジ	本	体	の	仕	様	変	更	時	に	対	応	が	必	要	と	な	る	場	合	が
あ	る	か	ら	で	あ	る	。	当	然	、	そ	の	仕	様	変	更	時	の	経	費	は	A	市	に
掛	か	る	し	、	何	よ	り	合	併	日	当	日	ま	で	に	間	に	合	わ	な	い	と	う	い
う	最	悪	の	事	態	が	待	っ	て	い	る	。	そ	の	点	を	A	市	側	(担	当	者	や
長	級	の	権	限	を	持	つ	人	達)	に	十	分	説	明	を	行	う	様	に	チ	ー	ム	リ
一	ダ	に	指	示	を	す	る	と	と	も	に	、	私	自	身	も	そ	の	交	渉	へ	積	極	的
に	参	加	し	協	議	を	行	っ	た	。														

	そ	の	結	果	、	以	下	の	様	な	要	件	と	な	っ	た	。							
・	パ	ッ	ケ	ー	ジ	の	標	準	機	能	で	行	う	機	能									
	課	税	。	納	付	書	の	印	刷	・	発	送	。	本	所	の	消	し	込	み	。			
	納	税	書	の	発	行	。																	
・	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	で	対	応	す	る	機	能									
	各	支	所	で	の	消	し	込	み	。	各	支	所	で	の	納	税	書	の	発	行	。		
結	果	的	に	は	、	一	番	利	用	度	の	高	い	本	所	の	機	能	は	パ	ッ	ケ	ー	ジ
の	標	準	機	能	で	行	い	、	各	支	所	で	の	機	能	を	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム
で	対	応	す	る	事	と	な	っ	た	。														

ウ	.	目	的	を	達	成	す	る	た	め	の	工	夫	と	そ	の	成	果	及	び	改	善	点	
ウ	-	1	.	目	的	を	達	成	す	る	た	め	の	工	夫									
	A	市	と	の	協	議	に	て	、	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	の	開	発	範	囲	は	極
力	抑	え	ら	れ	た	も	の	の	、	喜	ん	で	ば	か	り	は	い	ら	れ	な	い	。		
	当	初	、	機	能	追	加	等	の	リ	ス	ク	は	あ	る	程	度	想	定	し	て	い	た	も
の	の	、	今	回	は	新	旧	シ	ス	テ	ム	同	会	社	の	パ	ッ	ケ	ー	ジ	と	い	う	こ
と	も	あ	り	、	そ	れ	程	大	き	く	リ	ス	ク	へ	ッ	ジ	し	て	い	な	か	っ	た	た
め	だ	。																						
	そ	こ	で	私	は	、	追	加	プ	ロ	グ	ラ	ム	の	開	発	す	る	ス	ケ	ジ	ユ	ー	ル
を	工	夫	し	、	も	し	も	の	時	(遅	延	に	よ	る	納	期	の	遅	れ)	の	対	策
を	打	っ	た	。																				
	ま	ず	、	第	一	に	消	し	込	み	機	能	を	開	発	す	る	。	そ	し	て	、	テ	ス
ト	ま	で	行	い	、	品	質	確	保	さ	れ	た	後	に	、	納	税	証	明	書	発	行	機	能
を	開	発	す	る	。																			
	消	し	込	み	機	能	は	、	合	併	当	日	よ	り	使	用	さ	れ	る	可	能	性	が	高
い	が	、	納	税	証	明	書	の	発	行	機	能	を	よ	く	使	用	す	る	の	は	年	度	末

で	あ	り	、	す	ぐ	に	必	要	な	機	能	と	は	い	え	な	い	た	め	で	あ	る	。		
こ	の	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	に	関	す	る	ス	ケ	ジ	ュ	ー	ル	に	つ	い	て	も	
A	市	に	十	分	説	明	を	行	い	、	了	解	を	得	る	事	が	で	き	た	。				
ウ	一	2	・	成	果	と	今	後	の	改	善	点													
	そ	の	後	、	要	件	定	義	、	外	部	設	計	、	内	部	設	計	、	製	造	、	テ	ス	
ト	と	問	題	な	く	進	捗	し	、	無	事	合	併	日	当	日	を	迎	え	る	事	が	で	き	
た	。	そ	の	後	、	合	併	よ	り	数	年	が	過	ぎ	る	が	大	き	な	ト	ラ	ブ	ル	も	
な	く	安	定	稼	働	し	て	い	る	。	当	然	、	外	付	け	し	た	プ	ロ	グ	ラ	ム	も	
A	市	担	当	者	の	評	判	も	良	い	。														
	本	来	、	開	発	期	間	の	短	縮	や	コ	ス	ト	削	減	は	、	機	能	性	や	品	質	
を	犠	牲	に	し	な	け	れ	ば	な	ら	な	い	時	が	あ	る	が	、	業	務	パ	ッ	ケ	ー	
ジ	を	導	入	す	る	こ	と	で	大	半	は	解	決	す	る	。	し	か	し	、	パ	ッ	ケ	ー	
ジ	も	万	能	で	は	な	く	、	「	か	ゆ	い	と	こ	ろ	に	手	を	届	か	す	」	的	な	
と	こ	ろ	が	弱	い	場	合	が	あ	る	。	そ	の	点	を	外	付	け	プ	ロ	グ	ラ	ム	で	
補	う	こ	と	が	可	能	で	あ	る	が	、	そ	う	す	る	と	ま	た	、	納	期	や	コ	ス	
ト	に	影	響	が	出	て	く	る	。	ま	さ	に	イ	タ	チ	ご	っ	こ	に	な	り	か	ね	な	

論文添削結果

2010.01.19 (株) テレコムリサーチ
添削者：佐藤 創

【添削情報】

論文提出者：●●●●●様

問題 : 平成21年度 問3

【免責事項・その他】

本添削結果は、添削者個人の判断によるものであり、所属する会社や組織を代表する意見ではございません。また、本添削結果に即したからといって試験の合格を保証するものではありません。本添削結果の使用の結果生ずるあらゆる損害や被害について添削者は免責されるものとします。本添削結果の著作権は添削者に帰属します。

[目次]

1. 論文見出し構成の例
2. 論述すべき内容
3. 添削結果
4. 講評
 - (1) 添削結果の根拠について
 - (2) 総評
 - (3) 講評の詳細
5. 今後の学習に関するコメント

1. 論文見出し構成の例

以下に添削者が考える、本問題の見出し構成の例を示します。

1. 私が携わったプロジェクトの概要
 1. 1 プロジェクトの特徴
 1. 2 採用したパッケージと採用目的
2. 外付けプログラムの開発
 2. 1 外付けプログラムの開発が必要となった理由
 2. 2 利用部門との合意
 2. 3 開発した外付けプログラムの概要
3. 外付けプログラム開発時の工夫
 3. 1 業務パッケージの採用目的を達成するための工夫
 3. 2 工夫の成果、及び今後の改善点

2. 論述すべき内容

以下に添削者が考える、問題文から読み取れる題意と、求められる論述内容について、1. 論文見出し構成例に沿って示します。

見出し	論述すべき内容	備考
1. 1	①プロジェクトの特徴、あなたの立場、求められる要件などを明記。 <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト概要、プロジェクト体制 ・工期、工数、契約内容、担当工程など ・あなたの立場・役割 ・プロジェクトの制約事項・条件など ⇒業務パッケージの採用が適切だと想定できるようなプロジェクトの特徴であること	
1. 2	①どんな業務パッケージを採用したか（例：会計システム、販売システムなど）について述べられていること ②業務パッケージの採用目的について具体的に述べられていること ⇒業務パッケージ採用目的が、プロジェクトの背景や特徴を踏まえた内容であること。	
2. 1	①外付けプログラムが必要となった理由の根拠が適切だと考えられる内容であること ②外付けプログラムの開発がプロジェクトに与える影響（業務パッケージ採用目的が達成できなくなるなどの影響）について検討していること	
2. 2	①利用部門の利害と業務パッケージ採用目的とをうまく調整していることが伺える内容であること ⇒プロジェクトマネージャとしての交渉能力・調整能力が伺える内容であること ②外付けプログラムの開発を最小限に抑え、業務パッケージの標準機能を最大限適用するために、利用部門と合意した内容及び経緯について述べられていること	
2. 3	①開発する外付けプログラムの概要について簡潔に述べられていること	

3. 1	①業務パッケージ採用目的を阻害する可能性があることを把握し、その状況を回避するために適切な工夫をしたことが伺える内容であること	
3. 2	②工夫の結果と、今後の改善点について、前述までの内容と矛盾なく述べられていること	

3. 添削結果

添削者が考える論文評価結果を、A～Dランクに分けて示します。合格はAランクのみです。

評価ランク	内容	判定
B	合格水準にあと一步である	不合格

※A～Dランクの評価内容は以下の通りです。

- A：合格水準にある
- B：合格水準にあと一步である
- C：内容が不十分である
- D：出題の要求から著しく逸脱している

添削者が考える、各種の詳細な評価項目について、それぞれA～Dランクを示します。上位に位置する評価項目が、より重要度の高い評価項目です。

評価項目	評価基準	評価ランク	内容
題意の適切な盛り込み	設問や問題文で求められる題意が適切に盛り込まれていること	B	合格水準にあと一步
論理性	論述に根拠があり、論理的な内容になっていること <ul style="list-style-type: none"> ・行動や考えの背景として、経験や知識、分析結果に裏付けられた根拠が論述されていること ・行動した結果やプロジェクトの顛末を書いただけの論文になっていないこと ・論述が具体的・定量的で、かつ論理的であること 	B	合格水準にあと一步
プロマネの創意工夫	プロジェクトマネージャとしての創意工夫・判断基準が盛り込まれていること <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトマネージャらしい総合的な考え方(創意工夫)を論述していること ・プロジェクトマネージャの役割や責任を理解した上で、適切な行動等について論述していること ・専門用語などは本来の意味や目的を理解して用いていること 	A	合格水準にある
文章表現	文章表現が適切で、かつ理解しやすい文章であること <ul style="list-style-type: none"> ・論文としてふさわしい文章表現であること ・文章の内容が理解しやすいこと ・助詞などの用法に誤りがないこと ・誤字脱字がないこと 	C	不十分である

4. 講評

添削者が考える講評について示します。

(1) 添削結果の根拠について

評価ランクがBである理由は以下です。

- ①一部題意を適切に反映できていない箇所があるため
- ②論述内容が具体的、定量的でない箇所があるため
- ③文章表現が適切ではない箇所があるため

以下に総評と、①～③までの詳細の講評を示します。

(2) 総評

本問題で想定するプロジェクトの経験があることが大変よく伺える論文だと感じました。プロジェクトの特徴や内容について具体的な記述が多かったので、とても良い印象を受けました。また、題意もきちんと取り入れられており、しっかり書けている論文であると考えます。

ただし、一部において題意に則していない箇所がありました。そのため総評はBランクとさせて頂いております。また論述内容に具体性が伴っていない箇所や、直接論述の対象とはされていない内容について詳細に論述している箇所が見受けられました。この点において修正が必要ではないかと考えます。

詳細内容については、(3)をご参照下さい。

(3) 講評の詳細

①一部題意を適切に反映できていない箇所があるため

(ア)

「イー2. 利用者と合意した内容と合意に至った経緯」においては、外付けプログラムの開発がプロジェクトに影響を与え、当初の業務パッケージ採用の目的を達成できなくなるなどの問題があるため、最小限の開発にとどめるように顧客と合意した内容と、合意に至った経緯を論述する必要があります。

本論文では、外付けプログラムの開発がプロジェクトに与える影響と、顧客と最終的に合意した内容についての論述はありますが、合意に至るまでの経緯の論述がありません。外付けプログラムの開発を巡る、開発側と顧客側の利害の調整（トレード・オフ）について、プロマネ自身の調整力・交渉力を評価する論文ですので、合意に至るまでの経緯が論述されていないことは減点対象になると考えます。

本論文では、合意に至る経緯として、「A市側に十分説明を行うようにチームリーダーに指示を出すとともに、私自身もその交渉へ積極的に参加し協議を行った」と述べられているだけです。

本論文では、外付けプログラムの開発を行うと、①パッケージ本体のバージョンアップなどの際に、想定外の追加のコストがかかる、②当初の納期を守れない、という2つの問題があることが読み取れます。想定外のコスト負担はA市にとっては望ましくないものであるため、これをどのように納得させる交渉をしたのかを述べる必要があります。例えば、ランニング・コストの費用をA市が納得できるレベルにまで妥協したり、パッケージ本体のバージョンアップでは外付けプログラムが影響を受けないように設計を工夫して提案したりするなど、A市側との交渉の内容、及び合意までの経緯を論述する必要があります。また、当初の納期を守れなくなるという問題においても、外付けプログラムの開発を取りやめた場合、A市が公約を守れなくなるため、どのような提案をしてA市側を納得させたのか、その内容と経緯を述べる必要がありました。

以上の内容について修正する必要があると考えます。

(イ)

「ウー 2. 成果と今後の改善点」において、今後の改善点は、設問ウに関連した改善点を述べる必要があります。設問ウで行った工夫に対する改善点です。

本論文では、設問ウで行った施策への改善点について述べておりません。この点を修正する必要がありますと考えます。

②論述内容が具体的、定量的でない箇所があるため

多くはありませんが、もっと具体的な内容を論述したほうがよいと感じる箇所がありました。

(ア)

「ウー 1. 目的を達成するための工夫」において、「機能追加等のリスクはある程度想定していたものの、今回は新旧システム同会社のパッケージということもあり、それ程大きくリスクヘッジしていなかった」という文章がありますが、ここが具体性に欠けます。

「ある程度想定していた」、「それほど大きく」、「リスクヘッジ」のそれぞれについて漠然とした内容であり、具体的な論述が望まれます。

例えば、「我が社のプロジェクト運営基準では、通常であれば、機能追加等の変更を見込んで10%のスケジュール・バッファを確保しておく。しかし今回のプロジェクトでは、新旧システムが同一のパッケージであるため、通常のプロジェクトよりもリスクが少ないと判断し、運営基準よりも少ない5%のスケジュール・バッファを確保しただけであった。」のような記述が望まれます。

(イ)

類似する指摘になりますが、「ウー 2. 成果と今後の改善点」においても、今後の改善点を述べている箇所の論述が具体性に欠けると考えます。「あらかじめ確なリスクヘッジを行い、柔軟に対応できるプロジェクト管理」という文章は、かなり曖昧な内容です。前述の例を参考に、具体的な論述にすることが望まれます。

③文章表現が適切ではない箇所があるため

わかりにくい表現や用語の使用がいくつかありました。論文は相手に理解してもらうことが前提ですので、できるだけ簡易な表現にしたり、理解できる用語を用いたりするほうがよいと考えます。

また論文にはあまりふさわしくない文章表現がいくつかありました。論文では、口語的な表現はなるべく避けたほうが無難だと考えます。

これらの指摘は試験本番ではどのように判断されるか明確ではありませんが、論文の一般的な指摘内容でもありますので、できるだけ留意されたほうがよいかと思えます。これらについて以下に指摘をさせていただきます。修正例はあくまでも参考までです。

なお、もう1点気になる事としては、論文では直接的に論述が求められていないことについて、多く論述されている印象を受けたことです。

特に設問イでは、3町村の本所・支所の内容、合併目的の内容、などについて多くの記述がありますが、こういった背景は必要最小限にとどめることが必要だと考えます。また、「イー2. 利用者と合意した内容と合意に至った経緯」では、一般的なパッケージ採用時の目的について多く論じられておりますが、これも、今回のプロジェクトに特化した場合の内容に限定し、論述を縮小する必要があると感じました。というのも、設問イではすでに指摘させて頂いた通り、題意をもう1つ盛り込まなければなりません。論述文字数はすでに最大文字数である1,600字に届きそうなためです。この点について留意されると良いと考えます。論述の背景について述べてはいけないということではないと思えますが、そのために題意を取りこぼすのであれば問題だと考えます。以上のこともあり、論文全体としてどこか論点のはっきりしない印象も受けました。

(1)

- 【設問】 イ
- 【ページ】 1 ページ
- 【行数】 15 行
- 【指摘内容】 もう少し読み手に理解しやすい用語を使用してほしい
- 【指摘箇所】 消し込み
- 【修正例】 ※処理内容が理解しやすい用語に置き換えるべきだと感じました。
消し込みとはどのような処理なのか読み手は理解できません。

(2)

- 【設問】 イ
- 【ページ】 1 ページ
- 【行数】 16 行
- 【指摘内容】 もう少し読み手に理解しやすい説明をしてほしい
- 【指摘箇所】 支所の業務としては納税の受付を行い、本所へ送付する
- 【修正例】 支所の業務としては納税の受付を行い、本所へデータを送信する
(※何を送付するのか理解ができませんでした。仮にデータなどであれば、その点を明示的に書いて頂けると理解しやすいと感じます)

(3)

- 【設問】 イ
- 【ページ】 3 ページ

【行数】 13行
 【指摘内容】口語的な表現や過度な修飾はやめ、文語的な表現に置き換える
 【指摘箇所】最悪の事態が待っている
 【修正例】 **事態が想定される**

(4)

【設問】 ウ
 【ページ】 1ページ
 【行数】 6行
 【指摘内容】分かりにくい文章
 【指摘箇所】今回は新旧システム同会社のパッケージ
 【修正例】今回は新旧システム **ともに同じ会社のパッケージ**

(5)

【設問】 ウ
 【ページ】 1ページ
 【行数】 9行
 【指摘内容】誤字
 【指摘箇所】追加プログラムの開発するスケジュール
 【修正例】追加プログラム **を** 開発するスケジュール

(6)

【設問】 ウ
 【ページ】 2ページ
 【行数】 12行
 【指摘内容】口語的な表現や過度な修飾はやめ、文語的な表現に置き換える
 【指摘箇所】パッケージも万能ではなく、「かゆいところに手を届かす」的ところが弱い
 【修正例】パッケージも万能ではなく、 **詳細なカスタマイズ**が弱い

(7)

【設問】 ウ
 【ページ】 2ページ
 【行数】 16行
 【指摘内容】口語的な表現や過度な修飾はやめ、文語的な表現に置き換える
 【指摘箇所】まさにイタチごっこになりかねない
 【修正例】 **こうしたトレード・オフが必要になってくる**
 (※細かく言えば、イタチごっこという言葉はこの場合適切ではありません。トレード・オフが適切な言葉だと考えます)

(8)

【設問】 ウ
 【ページ】 3ページ
 【行数】 2行、4行
 【指摘内容】口語的な表現や過度な修飾はやめ、文語的な表現に置き換える
 【指摘箇所】そんな所を、そんな点を
 【修正例】 **そのような所を、以上を**

5. 今後の学習に関するコメント

題意の取りこぼしがありましたので、題意を確実に読み取る訓練を継続なさると良いと考えます。ご自身のプロジェクトでの経験や、実際のプロジェクトの背景を多く書いてしまうと、本来論述すべき内容が書けなくなる（文字数制限、時間制限のため）場合がありますので、ご留意頂ければと思います。

論文の自体はとても経験があると伺える内容であったため、評価が高いと考えます。今後も継続して学習を続けられれば、合格水準に到達できると考えます。

文章表現・構成としては、できるだけ結論を先に書くなどして、簡潔で論点のわかりやすい構成にすることが望まれます。例えば、設問イのA市の公約の論述箇所なども、論文としては少し不要な論述が多いのと、結論が最後にならないと見えてきませんでした。

論文全体としては、プロジェクトの開始から終了へ向かって順にストーリーを構築しますが、1つの文章や節としてはなるべく結論から先に書くことを意識すれば、論旨のはっきりした読みやすい文章になると考えます。

以上